

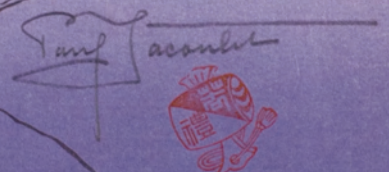
美術フォーラム21

Bijutsu Forum 21 / 2026

特集 ローカル、手わざ、素人芸…身体のオリエンタリズムの此岸



vol.53



特集

ローカル、手わざ、素人芸：身体のオリエンタリズムの此岸

I 芸術というジャンルと機能

1. フェティッシュを動かすもの

2. 「踊る」ということ——佐久間新とダンスの現象学

3. 限界芸術という新しいカテゴリを提案することの意味と効果

——大衆文化から限界芸術、そして二十一世紀の消費社会まで

II 歴史的な展望

4. 身体の〈動〉の表象とオリエンタリズム——キルヒナーが描いた日本の曲芸と演劇

5. 地方の手工芸をめぐる一九三〇年代——民芸、ペリアンから雪害調査所まで

6. ラテン音楽を「琴」で奏でる——一九七〇年代日本における伝統楽器の創出

III 今日の事例

7. 素人だからこそ、への転回

8. 都市の隙間を見つめる——「自主祭壇」と「街角ウンダーカマー」

	9. スケッチーズ―八瀬の石黒さん家から見た世界……………	中村裕太	64
	10. 手軽なテクノロジーとささやかな文化―贍写版のプリント・カルチャー……………	佐藤守弘	70
	11. セルフイという撮影行為―撮影者、撮影機器、被写体の関係に注目して……………	江本紫織	76
	「コラム」女性と切り紙―谷澤紗和子の作品から 高村智恵子、庫淑蘭、メアリー・デイレイニー……………	村松美賀子	82
書評	永井隆則編『ポスト印象派とユートピア』……………	河本真理	86
表紙解説	表 ポール・ジャクレー《波の音、東カロリン群島》一九三六年……………	猿渡紀代子	90
	裏 中山博喜《BORODINO》二〇二五年……………	竹内万里子	92
	執筆者紹介……………		94
	英文要旨……………	キヤロル・モーランド監修	97

特集 ローカル、手わざ、素人芸…身体のオリエンタ

リズムの此岸

上村博 編集

ローカル、手わざ、素人芸と並べるなら、この特集の狙いはおのずと察せられよう。大都市の美術館や劇場で鑑賞されるようなステイタスのある芸術に対して、周縁部の、マイナーな、低級とみなされている諸芸(術)を評価しよう、というものである。それはたしかに狙いの一端である。しかし実のところ、その評価のしかたについて考えることがさらなる目標である。

半世紀ほど前のE・サイードの著作がきっかけで、「オリエンタリズム」という語が、西洋から東洋への恣意的に作られた像の投影という意味で定着して久しい。しかしこのオリエンタリズムは単なる西欧近代にとつての他者表象ということにとどまらない。非西欧の内部でも、支配階層に近い人々とそこから遠い人々のあいだで、また西欧内部でも、都会のエリートと田舎の住民とのあいだで、同様の他者のステレオタイプ化が認められよう。パリのアメリカ人。東京人にとつての京都。京都人にとつての東国。こうした文化的中心にとつて周縁化される対象は、もちろんまずなによりも「地方」である。しかしまた、進歩し前進する現在から遠い場所・人・モノへも向かう。芸術史の先端とは無縁の伝統芸能、産業化から取り残された手工芸やそれらの保持者・伝承地などがそうである。ところで、このような芸術活動／作品の捉え方に

は、知性と感性、精神と身体という昔ながらの二元論を見つけることができるだろう。ただし、人間を自由にするものとして知性が考えられた昔とは違い、今日の社会に住まう我々にとつて、知性はもはや窮屈さをもたらすものとなっている。だからこそ、芸術に触れて感性や身体性を存分に発動したくなる。情報処理システム(そしてAI)があたかも人間を脅かしているかのように、手触り、感動、「五感」の経験がもてはやされる。ちょうど十九世紀の都市生活に倦んだ西欧人が夢見た遙かなる幻想のオリエンタと同じくらい、すぐ近くにある魅惑的な身体はオリエンタリズムの恰好の源泉である。つまり身体のオリエンタリズムは中心から見られた周縁イメージというだけではなく、近代の自己認識につきまとう特徴でもある。本特集が「ローカル、手わざ、素人芸」と銘打ちながら、都市の文化やプロフェッショナルの作品も扱っているのは、まさにそれが理由である。^(註)

ところで、オリエンタリズムは一方的な視線の押し付けということではないし、またセルフ・オリエンタリズムも単なる妥協や迎合の産物ということに終わるものではない。それは相互干渉的なアイデンティティの形成や批判的再解釈の機会でもある。近代人の視線に回収されない、あるいはそれと無関係に

存在する「純粹な」オリエンタがあるというのは、これまたひとつの幻想であろう。そもそも、いかなるアイデンティティであれ、他者を内包して成立する。オリエンタであれオクシデンタであれ、外部因子や周縁を含みつつ、それらと付き合っていくしかない。

こうして、身体(セルフ)オリエンタリズムの向かう先は実にさまざまならわれをとる。周縁への好奇な視線にとどまらず、秩序に対するカオスの礼讃、現在に対する過去やそしてそのヴァリアントとしてのSF的未来の美化、ITに対する手仕事の繊細さや機械(スチームパンクなど)のダイナミズムの強調。しかし身体的なものは、そもそもそうした分類に収まらない自発性を持っているのではないだろうか。そしてまた、それが先端的な芸術、中央の文化、高度な情報社会にとつて依然として面倒なもの、恐るべきものであるからこそ、身体のオリエンタリズムという埒内に囲い込もうとしたようにさえ思われる。そうした身体は、実のところ「知性」対「身体」といった理念的な関係性の此岸にあって、そこから逆に知性や身体のみならず、そこに問いを突きつける。ローカルなもの、手わざ、アマチュアリズムのなかには、キッチュなものとして面白がられたり、「現代アート」のネタに採用されたりでは終わらないものが

おびただしく棲息している。それらは理想化された原初的身體への回帰やフェティシズム以前に、芸術の制度そのものをアド・ホックに厭くことなく生み出す自然(ピュシス)である。

本特集の構成は三つの部分からなる。概念的な反省・歴史的な事例検証、今日の諸実践の考察である。

まず、第一部では、芸術という営みのそもそもの意味から考えよう。身体的なものや周縁的なものを論じるためには、「美術」という強い制度を相対化することは不可欠であるが、その際にプリミティヴィズムやヴァナキュラリズムといった概念は大いに有効であろう。しかし、それらの語そのものが近代的進歩や文化的中心に対立する意味合いを持つてしまうため、ここではあえてそれらに頼らず、芸術の機能をあらためて考察する。上村博「フェティッシュを動かすもの」は個人の身体にとつての制作行為の必要性を、富田大介「踊る」ということ——佐久間新とダンスの現象学」は、舞台芸術作品とは異なる、世界と身体との共鳴としてのダンスを論じる。谷川嘉造「限界芸術という新しいカテゴリを提案することの意味と効果」は鶴見俊輔の用語が今日なお有する意義をあらためて考察している。

つぎに第二部では歴史的展望として、近代の汎地球的な物的交流(あるいは衝突)が、身体的なレヴェルで文化的アイデンティティを揺さぶり、模索させた状況を振り返りたい。仲間裕子「身体(の動)の表象とオリエンタリズム——エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナーが描いた日本の曲芸と演劇」では画家キルヒナーに日本の舞台俳優の身体運動が与えた

衝撃と文化越境のさまを明らかにし、土田真紀「地方の手工芸をめぐる一九三〇年代——民芸、ペリアンから雪害調査所まで」では、伝統的な手工芸のうえにモダニズムが確認したみずからの意義を論じている。鈴木聖子「ラテン音楽を「琴」で奏でる——一九七〇年代日本における伝統楽器の創出」はソプラノ琴の発明過程をたどることで近代に世界各地で生み出された伝統的音響空間の再編成の一例を示したものである。

第三部では、今日的な事例が中心となっているが、大きくは住環境に関わるものと個人的なメディアに関わるものとに分けられる。まず、乾久美子「素人だからこそ、への転回」は「素人なのにうまい」という玄人との比較を前提にせず素人の関与を評価する視点を呈示し、小澤京子「都市の間隙を見つめる——「自主祭壇」と「街角ヴンダーカンマー」」は職業的専門家によらない制度逸脱的な都市景観に注目している。中村裕太「スケッチーズ——八瀬の石黒さん家から見た世界」は陶芸家のスケッチを取り上げて、そこに日常を可視化する独自の表現媒体を認めている。他方で、ガリ版という小さな印刷技術を取り上げ、プリント(痕跡を押しつけること)というメディアウムの可能性に注目した佐藤守弘「手軽なテクノロジーとささやかな文化——贍写版のプリント・カルチャー」と、おそらく量的には今日最も大量に生み出されているであろう制作物を扱う江本紫織「セルフイという撮影行為——撮影者、撮影機器、被写体の関係に注目して」は、いずれも個人的な身体が技術によって固有の文化的領域の中で外在化・社会化される状況を考察している。最後にコラムとして載せている村松美賀子「女性と切り紙——谷澤紗和子の作品から

高村智恵子、庫淑蘭、メアリー・デイレイニー」は、ジャンルの問題とジェンダーのそれとにまたがる示唆的な事例を紹介している。

芸術の現れようは自然的・社会的環境に依じておのずと独特かつ創発的である。本特集の諸論者が示している芸術の多彩な現れも、単一の芸術的価値基準のもとで取捨ないし序列化されるようなものではないが、しかしまた同時に全体として理解・共有が可能な文化圏を作るものでもある。それぞれは既存の制度をはみ出す個性を持ちながら、それでもやはり芸術の世界のポリフォニー的豊穡を端的に示しているといえよう。

(註) 本特集ではいわゆる「地域アート」はあまり取り上げていない。どうしても芸術の専門家が地域に入って行う請負仕事という性格が強いからである。勿論、地域のアート活動にも、単に地域風土を素材として利用するのではなく、土地やその住民との交流のなかで思わぬ成果を見せるものもあり、制度的な芸術に取まらないものがあることは認めなくてはならない。他方で、本特集で取り上げる対象と完全に重なるわけではないが、「ヴァナキュラー・アート」という概念はむしろ今回のテーマ設定とさわめて関連性が高い。ポスト・コロニアリズム的な問題意識が顕著になって以降、建築や写真にとどまらず、各地の非職業的実践をそれぞれにおいて評価しようとする試みはしばしば行われてきた。なかでも菅豊(編)「ヴァナキュラー・アートの民俗学」(東京大学出版会、二〇二四年)では、実に興味深い事例の数々とともに、「ヴァナキュラー・アート」という語とその意義が考察されており、参考となる。

* 本特集は、きょうと視覚文化振興財団による二〇二五年度視覚文化研究会A(研究員・上村博・佐藤知久・富田大介・仲間裕子・村松美賀子)の成果を上村がとりまとめ、編集にあたった。



9784925185837



1921370023002

ISBN978-4-925185-83-7

C1370 ¥2300E

定価 2,530 円(税込)

